

発表要旨・討論の概要

これらのえがいた理想像はおおむね次のようである。D, C, I, N, Co, A, S の7つの尺度においては、1あるいは2というところにはいつている。O, R, Ag, T の4つの尺度は他の尺度と異なり、2あるいは3になっている。かれらのなかには現実と理想とが著しく相違しているものがある。そのなかには現実的な像と理想的な像とのあいだに、大きな葛藤を感じているものがあるとともに、深味のある個性、運命に対して大きな役割を果たしている人間像を持つているものもある。

309 顔と名前の記憶(2)

—女子学生について—

石川 透(静岡大学)

目的: 入学直後の学生が同級生相互の顔と名前を記憶する過程を明かにする。

方法: 対象は保育専門学院1年生 A, B 組計105名。教室の座席にいる同級生の顔を見ながらその姓名(姓か名でもよい)と記憶した理由を座席表に記入。記憶の努力、興味を5段階評定。約1週ごとの3期に調査。

結果: 各期ごとの記憶率(被記憶率)は約38, 29, 19%(A組)のように減少してゆく。記憶の誤りも減つてゆく。記憶数と被記憶数との相関があるとはいえない。記憶数と被記憶数の差が+27, -29(A組)のように著しい個人が第1期にある。記憶数、被記憶数と知能との相関は-0.270~0.295, 向性との相関は-0.482~0.386の間になつたが、全般的にみて相関があるとはいえない。記憶理由には名前、座席、自己紹介、役員、性格行動など諸種のものあげられ、全員によつて記憶された者についての理由も個々に異つている。座席の近い者を早く記憶する傾向がある。第1期において記憶率と努力・興味の程度とは関係があると思われる。

310 家族員評定による性格特性に関する諸考察

—他人評定について—

篠原 陸治(東京教育大学)

<目的> 家族員が相互に性格評定する際、その妥当性はどのような諸変数によつて作用を受けるかということについて検討する。なお、妥当性は、ある約束のもとに決められた真実性格と評定結果との相関係数であらわす。

<手続> 被験者一両親・子4名(15才~)実施一カード72枚(特性はYGに準ずる)の強制Q分類。

<整理基準> a 評定者側条件一年令順位, 性差, 自己客観視能力, 閉鎖的・開放的性格。b 被評定者側条件一年令順位, 性差, 向性, 閉鎖的・開放的性格。c 両者の

関係に規定された条件一性格の類似度, 同異向性, 同異性。d 性格特性。<結果と考察> 幾つかの基準が、十分に統計的検定にたえうるものではなかつたが妥当性への作用因子として暗示された。つまり……被評定者との性格類似度の高い……男子が……男子を… Overt なしかも……家庭場面において、その特性を指示する明らかな行動が見られるような、性格特性を評定する際、妥当性は高まる。なお自己客観視能力⑥の閉鎖的開放的性格④項の再検討は有意義であろう。

311 Q-technique による Self-Concept の研究(第2報告)

藤原 喜悦(東京学芸大学)

目的 青年の Self-Concept を研究するにあたり、forced distribution と free distribution との2つの規準にもとづく Q-sorting のうち、いずれが安定度が高いかを実証的に検討した。

方法 大学生40名を2群にわかれ、第1群には free sorting, 第2群には forced sorting を、Present Self および Ideal Self について行わしめた。ほぼ1週間の間隔で各群に再度同様な試行をなさしめた。

結果 2回の sorting 間の変動は、予期したように、free sorting 群の Present Self が最大(M=134.6) Ideal Self がそれにつき(M=119.5), forced sorting 群の Present Self が第3位(M=103.0), Ideal Self が最小(M=87.0)であつた。したがつて、forced distribution の方が、measure の安定度という観点からは、すぐれているといえよう。なお、free sorting のばあいの分布にはさまざまな型が見出され、しかも2回の sorting ではかなり分布型も変化することが明らかにされた。

312 青年期における同一視と自我像

徳田 安俊(福島大学)

仮説: SD 法を用いて、自己、環境中の主要人物(父・母・友人・先生)および種々の対人行動(協力・指導性・反抗・服従・孤独)を評定せしめた場合、(1)不適応群(E群)は適応群(C群)よりも自己を他人に identify することが少いであろう。(2)C群は比較的積極的な対人行動に、E群は消極的な社会行動に近く自己を視るであろう。(3)青年後期には、同一視の困難(identity diffusion)が見られるであろう。方法: 自己評定の自己防衛や social desirability による歪曲を少なくするために、Scale は相良・山本氏らの研究による4因子から取り、特に性格特性的なものにしなかつた。「私」と他の concepts との similarity の測度として Osgood の D 値を用いた。Ss